

### 第3回上北の元気結集協議会会議録

日 時 平成19年11月13日(火) 14:30開会 17:10閉会

場 所 十和田市・富士屋グランドホール2F「平安の間」

出席者 別紙出席者名簿のとおり

- 会議次第
- 1 開 会
  - 2 挨 拶
  - 3 議 題
    - (1)「上北の元気づくり推進プログラム」(骨子案)について
    - (2)平成20年度当初予算の検討状況(上北地域県民局関係)について
    - (3)その他
  - 4 プレゼンテーション  
「持続可能な農業の実現が地域を元気にする  
～生産者・生活者・関係機関の連携による取り組み～」
  - 5 閉 会

#### 議事の概要

#### 1 開 会

(司会)皆様、お集まりいただきましてありがとうございます。定刻となりましたので、只今から「第3回上北の元気結集協議会」を開催いたします。それでは開会に当たりまして北村県民局長からご挨拶申し上げます。

#### 2 挨 拶

(北村県民局長)第3回協議会の開催に当たり、ご挨拶を申し上げます。

皆様におかれましては、ご多忙にもかかわらず、お集まりいただきありがとうございます。

さて、前回の第2回協議会において、「上北の元気づくりに係る提言(骨子案)」を協議いただきましたが、その後、協議会で議論あるいは提言いただいた内容や、協議会后にさらにご指摘いただいた事項等をもとに、数回にわたり修正検討を行うなどし、9月下旬に「上北の元気づくりに係る提言」として取りまとめることができました。皆様には郵送でお届けしておりますが、作業に当たって熱心な意見交換や各種情報提供等をいただき、改めてお礼申し上げます。

この提言が、当協議会も含めた上北地域に対する提言として取りまとめたものであることはいまでもありませんが、県、市町村及び各種関係団体等がともに連携し、それぞれにおいて具体的な取り組みにつなげていくことを目指すものであることから、私も上北地域県民局長としての立場で、去る10月5日に開催された庁議において、三村知事に対して、この提言書の内容を説明し、上北

地域の重要課題である東北新幹線全線開業に向けた取組や農林畜水産業の振興などに関わる緊急かつ広域的な施策については、県としても一層積極的に対応する必要があるということなどを報告して参りました。

また、昨日は、市町村の担当者の方々にお集まりいただき、「市町村発元気なあおもりづくり支援事業補助金」の説明会を開催し、提言内容に基づく市町村事業の実施等に当たって、県の支援制度を活用してもらうよう説明を行ったところです。

本日は、提言内容を踏まえて、さらに具体的な取組等に関する実施案をプログラムとして整理し、取りまとめることとしていますが、会員の皆様には引き続きよろしく願いいたします。

(司会) 次に、本日の出欠状況ですが、十和田観光電鉄(株)の澤頭様に代わり、同社取締役の関様が代理で、また、日本原燃(株)の川井様に代わり、地域交流部長の木原様が代理で、それぞれご出席いただいております。

また、アドバイザーとして、(株)オフィス・エスティの堤さんに出席いただくとともに、当協議会の顧問である、北里大学獣医学部教授で、北海道八雲町にあるフィールドサイエンスセンター長の萬田教授にプレゼンテーションをお願いしております。なお、萬田教授におかれましては、プレゼンテーションの時間に併せてお越しいただく予定ですので、その際にまたご紹介いたします。

次に、本日の進め方ですが、次第にありますように、まず、議題の1「上北の元気づくり推進プログラム(骨子案)」について意見交換を行い、次に、「県の平成20年度当初予算の検討状況(上北地域県民局関係)」について事務局から概要を報告いたします。そして、協議終了後に、萬田教授のご講演とさせていただきます。なお、このご講演に関しては、協議会会員以外の方々からも聴講の希望があったことから、一緒に聴講いただくこととしています。

全体の時間スケジュールは、協議は16時位を目処とし、16時10分頃から萬田教授のプレゼンテーションをお願いし、協議会終了時間は17時を予定しております。

また、会議開催に併せてご案内しておりますが、17時15分頃から、「上北の味 食談義」と題して、上北の魅力の一つである豊富な食材や加工品、料理等に関する試食懇談会を、会費制により開催しますので、よろしく願いします。

本日の配布資料は、次第の下段に記載のとおりですのでご確認をお願いいたします。

それでは、議事に入りますが、要綱第6条第1項の規定により会長が会議の議長を務めることとなっていますので、この後の議事進行は北村会長に引き継ぎます。

### 3 - (1) 「上北の元気づくり推進プログラム」(骨子案)について

(議長) それでは、議事に入ります。議題の1「上北の元気づくり推進プログラム(骨子案)」について、事務局説明してください。

(事務局) それでは、資料1をご覧ください。この資料は、先週末に事前送付し、会員の皆様には、既に目を通していただいているかと思えますし、時間の関係もありますので、主要な点を中心に概要を説明させていただきます。

まず、「はじめに」ですが、本プログラムの作成の趣旨とプログラムの性格を記載しております。上から5行目以下になりますが、本プログラムは、「上北の元気づくりに係る提言」を踏まえ、提

言内容の実現に向けた実施案を取りまとめたものであるということ、提言書において、各テーマの「提言の柱」に沿って整理した「具体的な取組内容」について、更に、実施時期、実施主体及び実施案を記載していること、このプログラムは、提言書と一体のものであり、これらに基づいて、県、市町村及び各種関係団体等が連携し、それぞれにおいて、具体的な取組につなげていくことを目指すものであるということの3点を確認いただきたいと思います。

次に、「上北の元気づくり推進プログラム」についてですが、「基本的考え方」として、「実施時期」については、上北地域においては、2010年に予定されている東北新幹線全線開業により、七戸に新幹線の新駅が設置されることが、今後の地域づくりを進めるうえでの大きな契機となることから、この2010年を基準とし、新幹線全線開通に向けた取り組みを「短期」とし、新幹線全線開通に伴う取り組みを「中期」ということで、実施時期については、大きく2つに区分しています。2ページからが別表となりますが、実施時期欄の「 」は、特に20年度において重点的に取り組むべき事項を示しています。

次に、「実施主体」ですが、「県」「市町村」「関係団体等」及び「県民」の4つに区分しています。なお、「関係団体等」の中には、「上北の元気結集協議会」のほか、「商工、観光・物産、農林畜水産、交通・宿泊、保健医療、地域づくり等に係る団体、機関、企業等」を含んでいます。また、同じく2ページ以降の別表中、実施主体の欄に記載している「 」は主体、「 」は連携・協力を示しています。

次に、「実施案」についてですが、提言内容を実現していくために関係すると考えられる県や市町村の既存の事業や、関係団体等あるいは県民の皆さんが現在取り組んでいる活動等をもとにして、更に今後事業化が必要と考えられる事項も含めて、県、市町村、各種関係団体及び県民が連携し、役割分担を行いながら取り組むことを想定しています。なお、「今後事業化が必要と考えられる事項」については、特に、県、ここには県民局も含みますが、上北地域の特定課題に係る緊急性や広域性を要する事業で、上北地域での取組がモデルケースとして、県全域あるいはその他地域へも波及効果等が期待できるものとしています。また、市町村においては、単独あるいは広域での特定課題に係る緊急性や地域性を要する事業を中心に、県の「市町村発・元気なあおもりづくり支援事業」等の支援制度を活用するなどして事業化を図ることを想定しています。

それでは、2ページをごらんください。ここからがプログラム案となりますが、この表の見方としては、一番左側の欄に記載してあるのが、提言書の内容であり、この左側の欄の一番上の「1 農・畜・水産物の高度化とファンづくり」は、提言書の中の3つのテーマの一つで、次の行の「(1)食育、安全・安心とこだわりのアピールによる販売促進」というところは提言の柱、その下の からが具体的な提言内容となります。そして、この提言内容に対して、右側の欄にそれぞれ実施時期、実施主体、実施案ということで個別に整理してあります。

また、今回皆さんに示すこのプログラム骨子案は、県民局の地域支援室がたたき台として作成したものであり、事前に関係市町村や団体等に、協議あるいは意見照会するなどして整理したというものではなく、あくまでも今日皆さんに示すのが初めてであり、この協議会での意見交換等を踏まえ、また関係市町村にはそれぞれ持ち帰って検討してもらうなどして、意見集約を図りながら当協議会として、提言内容を実施するためのプログラムとして取りまとめていくということでご理解願います。

それでは、まず、最初の提言の柱である「食育、安全・安心などのアピールによる販売促進」に関してですが、食糧供給基地として早期に取り組む必要があることから、いずれも短期としており

ます。ただ については、中期にも がついていますが、これは食育推進あるいは食生活改善推進といった取組は、県民運動として継続性が必要であることから、このように整理しております。また、実施主体については、生産・流通関係者や農協等が第一義的に取り組むべきであるということで、実施主体は「団体」のところに をつけてあります。ただし、 の「土づくり」や の「食育」といった分野については行政の取り組みも重要であることから、「県」あるいは「市町村」のところに をつけています。

次の3ページの「(2)日本一の食材を活かしたメニュー、商品開発、店づくり」についてですが、これらについては、東北新幹線開業までに取り組むべきであるとの考えから、実施時期については短期とし、特に県においては、「マーチャンダイジング支援事業」や、「農村起業家等の支援に関する事業」、これは、いわゆる農家レストランの開設や、産直施設の運営や魅力づくりなどへの取り組み、あるいはマーケティングや商品のPR手法等に関する情報を提供するという支援に関する事業ですが、これらによって20年度重点的に取り組むこととしていることから、 としています。

次に、「(3)元気のある女性起業家づくり」についてですが、実施時期を短期とし、特に継続実施が必要と考えられる のマーケティングや、 の販売促進に係る取組については、中期的にも取り組むこととしております。また、取組内容の から に関係しましては、先程お話ししました「マーチャンダイジング支援事業」や「農村起業家等の支援に関する事業」によって、県としても積極的に支援を行うこととしております。

次に、「(4)生産者の顔が見える流通・販売促進」についてですが、取組内容の から については、実施時期として短期、ただし、継続性が必要なものは中期的にも取り組むこととしています。また、実施主体は、基本的には関係団体等が主体となるものと考えられますが、 の物産品フェアや の地場産品の利用拡大等については、行政サイドの取り組みも重要であり、実際に市町村が既に取り組んでいるものもあることから、実施主体については、市町村も としています。

次に「(5)公設試験研究機関や北里大学等の地域の「知」の結集」についてですが、特に については、今後広域連携や産学官金連携の推進に係る各種検討組織の設置や具体的な取組等による相互の交流や情報交換を行うなどし、県民局も中心となって連携体制の構築に努めていくこととしております。また、 の飼料稲の生産拡大といった点については、緊急性と重要性が認められることから、県及び関係団体等が連携しながら、飼料危機対策検討のための組織を設置するなど、20年度重点対策として飼料用稲栽培促進のための体制づくりを進めることとしており、実施時期については、短期の とし、実施主体については、県及び団体を としています。

次に2つ目のテーマである「東北新幹線開業ビジネスモデルづくり」についてですが、最初の提言の柱である「(1)広域観光の取組体制の推進」については、新幹線開業に向けた取組の中でも、極めて重要で必要不可欠なものであることから、20年度において重点的に取り組むべきものとし、県、市町村、関係団体等がいずれも主体として連携していく必要があるということで、それぞれに をつけております。なお、広域観光の具体的な取組としては、七戸の新駅を起点とした観光モデルコースの設定、上北地域の景観資源等の調査や活用などによる地域の魅力づくりに関する事業等を行うことを想定しています。

次に「接客マナーやおもてなしに関する取組」ですが、これについても新幹線開業に向けて一層積極的に取り組むとともに、開業後も継続的に取り組む必要があるということから、実施時期は、短期及び中期としています。特に のおもてなしの取組に関しては、県の開催する「おもてなしセミナー」や「おもてなし指針」の作成等の事業を活用して、20年度に重点的に取り組むこととし、

実施時期を とするとともに、県民も含む関係者が一体となって取り組む必要があることから、実施主体は全て県、市町村、関係団体、県民の全てを としています。

次に、7ページになりますが、「地域情報の発信等」ということで、タウンマップや情報誌等の作成については、やはり商工・観光関係団体等が主体として頑張っていたとすることで、実施主体は団体のところを としています。

次に、「(2)資源の再発見と魅力づくり」についてですが、「上北地域の地理的、歴史的繋がりを軸とした観光ルートの開発」といった点に関しては、 の健康増進等に関する体験・宿泊型観光の推進、 の牧場や牛・馬等の活用といった提案内容に対しては、県民局としても、奥入瀬溪流の自然や温泉、豊富な食材等を活用した「健康」や「癒し」をテーマとした健康観光ツアーの推進に関する事業を20年度の重点対策として検討していることから、実施時期については、短期の としています。また、 の十和田湖の再生に関しては、十和田市が十和田湖観光再生計画に基づいて、検討会により検討を行っていることを踏まえて、実施時期は短期の としています。また、 の二次交通対策も極めて重要であることから、実施時期を短期 としていますが、実施主体については、交通事業者を中心に第一義的に検討がなされるべきであることから、団体欄を としています。ページ一番下の、 歴史文化資源の活用のほか、9ページの シーニックバイウェイと の稲生川の活用、 の在来線の駅活用に関しては、広域連携による取組が必要であることから、県としても景観資源や駅周辺資源等の活用による事業を検討しているところであり、実施時期を短期の としています。また実施主体についても県と市町村が連携して取り組むことからそれぞれ としています。

次に、「地元の食材などを活かした土産品等の開発」についてですが、最初の農畜水産物のファンづくりに関する取組のところでも述べたとおり、新幹線開業に向けて、県のマーチャンダイジング支援事業等を活用して早期に取り組む必要があるということで、短期 としています。11から12ページは、「マーケティングと情報発信の強化」についてですが、特に12ページ最下段の 地域ソーシャルネットワークシステムの取組などは、インターネットを活用した地域内のコミュニケーションや地域情報の共有などに関する新たなスタイルとして、県内では八戸市で先進的な取組が行われていますが、市町村や関係団体を中心として、上北地域でも検討・構築されることが望ましいと考えられるところです。

次に、3つ目のテーマである「健康、安全・安心な地域づくり」についてですが、これらは住民運動として長期的に取り組んでいくべきものであるということで、実施時期については短期及び中期としています。そして、実施主体は、安全・安心な地域づくりについては、行政と各種団体を中心とし、食からの健康づくりについては、県民自らも取り組む必要があるということで、各種団体を中心に行政と県民も一緒に取り組んでいくこととしています。また、セーフコミュニティ活動については、特に実施案として、十和田市が全国でも先進的に取り組んでいることから、まずは、県の市町村発補助金等を活用して、十和田市においてモデル事業として集中的に取り組んでいただき、それをもとに上北地域に普及していくこととしています。以上です。

(議長) 只今事務局から説明がありましたが、プログラム骨子案について意見交換を行いたいと思います。まず、只今の事務局の説明に対して、何か質問はございますか。

それでは、テーマ毎にご意見を伺います。まず、1つ目のテーマ「農・畜・水産物の高度化とファンづくり」についてですが、例えば3頁の(3)「元気のある女性起業家づくり」に関しまして、道の駅おがわら湖産直友の会で、実際に農家レストラン運営等を行っている小笠原さん、日頃の活動

を通じて、それぞれが取り組むべきことについて、何かご意見はございませんでしょうか。

(小笠原会員)私は道の駅で野菜とか売っていますが、最近の食に関する事件や問題に関する報道等を見て、友の会でも商品の安心安全には一層注意するようになりました。特に、安心ということでは、スーパーと比べて道の駅のお客が増えてきたように感じます。社会的風潮として、食の安心安全を求めのお客が増えてきたということからも、農家女性はますます意気投合して頑張っています。また、レストランの方もさらに気を引き締めて、安心安全や手作りのイメージを出すように毎日頑張っています。今日の食談義には、私たちの長芋すいとんを持ってきました。野菜農家にとっては土づくりが基本です。白菜とか赤カブなんかは連作障害がでますが、それは皆さんと一緒に勉強しながら対応しています。最近は農家の方々も心新たに、勉強する気持ちが高まっており、団結力で頑張っています。

このプログラムでは、実施主体の団体のところに二重丸が付いてますので、私たちが市町村やJAと一緒に協力し合いながら取り組んでいきたいと思います。

(議長)農畜水産物のファンづくりについて、もう少しご意見を伺いたいと思います。宮さんは、道の駅の経営に携わっていますが、マーケティングやPRといった点について、いかがですか。

(宮会員)道の駅よこはまの宮です。平成11年に開業しまして9年目です。「なたねの会」と言ひまして、町の商店ではなく、農家やお母さん方の会があります。この会の売上は年々伸びており、中でも特に伸びているのが加工品です。手作り品で、よこはまの道の駅でないと買えないというものです。今まではお金もなく、白いテーブルの上に商品を陳列していましたが、今年の春先にお金を掛けまして、平台を新設しました。陳列台も見栄えが良くなり、商品も手作りのものが並んでいるということで、非常に商品の動きがいいです。団体客もそこに目が行きますし、常連のお客もよこはまに来たら、まず、そこに行きます。もちろん生鮮野菜もありますが、そういう形での動きが大きいです。思うに、大量の商品を、多くのお客に売り込むという考えは、女性起業家には必要ないと思います。本当にいい物で、ここでしか買えないという売り方を地道にやっていると、お客さんが付いてくるということを実感しています。

また、道の駅の仕事とは別にプライベートで、菜の花トラストという市民運動を行っています。NHKの青森支局が昨年から目を付け、菜種油を半年間かけて取材し、10月7日にTVで全国放送されました。そこまでのというくらい手間暇掛けて最高級の商品に仕上げ、限定品ですよという形で売っていますが、やはり、お客さんは付いてきます。「そういったものを捜していたんだ」というお客さんが非常に多いです。ですから、女性の起業家を目指すのであれば、まずは大きく沢山というよりも、この上北にあるすばらしい資源を、手間暇かけて、磨き上げて、売っていくのが一番いい方法だと思います。

(議長)先般、古牧温泉で開催された「青森秋の大収穫祭」に参加された、上北農産加工の大山部長さんから、イベントの開催状況なども含めてご意見をお願いします。

(大山会員)先般10月、古牧温泉主催で県南の物産フェアが開催されまして、50店舗が出店していました。県南以外にも、平内や蟹田から、さらに県の販売戦略担当者も来てました。第二グラウンド

ホテルの上の駐車場にテントを張って会場としていました。紅葉時期には少し早かったのですが、観光客、宿泊客相手に、古牧温泉でもいろいろ広告を打って、日曜日には3,500人ぐらいの出がありました。出店のコマを見ると、手作りの食べ物、ソバ、櫛餅、産直の野菜等には大分人が集まっており、その場で食べられる店は売り上げが上がっているようでした。中には、普段、店頭になくともあってなかなか手を出しにくい商品もありました。スーパーとかで見かけない。県内道の駅でも、地産地消とうたっていますが、地元の人知らない。こだわりの女性部とか、農協の加工食品とかがありますが、地元の口に入らずに県外に売られているものもあります。商売といえばやむを得ないのですが、大都市にばかり行くのは残念だと思っています。地産地消と言いますが、一般の県民の中には、地元において、地元の食材で何が作られているのか分からない人が大変多いように思います。そういう意味では、地産地消食材をもっと知ってもらうような取り組みが必要であると感じています。

(議長) この件に関連して、村井社長さん一つお願いします。

(村井会員) 桃川の村井です。この関連からいうと、いま農工一元化ということで県も大変力を入れている分野があるわけですが、私は製造側の人間ですけれども、この農工と一緒に組んで青森県のすばらしい食材を、もちろん生のまま食することが一番いいでしょうけれども、これを流通させるということになると、日持ちをさせなければいけないことから加工が必要だということです。日本一の農作物がいっぱいあるわけで工業と組んでやっていきたいと思っはいますが、意外な意識の壁がありましてなかなか一致しない。簡単にいいますとマーケティングで売るために作っていいところと一致しない。それと量と質、先程の大山さんの話にも関連しますが、量のあまり無いものを、どうやって日本全体に知らせしめるのか、という難しいものがあります。実体験から申し上げますと、以前、知事のトップセールスに同行しました。イトーヨーカ堂に行きまして、当時の井坂社長や他バイヤーの方々がズラリとお出でになって、こちら知事さんはじめ業界の人間、県庁の部長さん方も行きました。そのときに、倉石産の牛肉が出ました。それを見たイトーヨーカ堂の井坂社長、あの大企業の社長が「これはすばらしい」と言って、「私、実は食品関係のバイヤーをやっていました。見れば分かります。これは是非考えさせていただきたい。」と、「ところで、量はどのくらいありますか」となったんですが、そのとき三村知事があわてて「あれっ、倉石にベゴ何頭いるべ」といって、聞いたら20数頭という話で、「それだとヨーカ堂は、とつても扱えない。特定の店だけでやろうか。」ということがありました。このような、質と量との兼ね合いを工業的に克服していけないかが、我々の大きな課題であろうかと思ひます。特に素材ですばらしいものを持っている青森県の農水産物を製造業あるいは流通業と組み合わせることが必要だと思ひます。

もう一つ、新幹線に絡む話ですが、新幹線の項目を見ましても、どうやって来てくれた人を受け入れるかということが中心になってはいますが、是非、新幹線を契機にして、外へ出て行くことにも視点を置いてはどうかと思ひます。それが農工一元化にも繋がってくるんですけど、いわゆる高速交通体系が発達すればするほど、地域間格差や企業間格差が広がっていくという、前回の協議会での青森大学教授の話もありました。私も実感としてそう思ひます。であれば受け入れるのはもちろん大事ですけど、これをきっかけとして、県民も自信を持って外へ打ち出して行く、ということも是非この提言の中に入れていただきたいと思ひます。

(議長) その他、農畜水産業の振興に関して何か。

(柏崎会員) 先程、古牧温泉の秋の収穫祭に関してお話がありました。私、おいらせ町ですが、佐藤さん(古牧温泉)からお話いただいて、参加させていただきました。1回目ということもあって、私たちのグループでは参加する人も少なかったものですから、声を掛けたもう1人と、二人で小さいテントを借りました。ともかく、観光客に「おいらせ町」という名前を知って欲しいと。奥入瀬というのは青森県のイメージだというのはいろんなところで聞いていますが、「おいらせ町」と「JAおいらせ」は、市町村合併のせいで、どこのかわからない。地元の人でも、JAおいらせが、どこの地域かわからない。そういうものが入り交じっているものですから、ともかく「おいらせ町」の名前を知って欲しいと思いました。旗を立てて、お客さんから1個でも買って貰って、帰って欲しいという二人の意見で参加しました。新しい町のため、おいらせ町とだけ書かれた旗がなく、紙に手書きで書いてテントの横に張りました。後から、もっと大勢の人に呼びかければよかったと反省しました。おいらせ町には黒ニンニクもありましたし、個々にもいろんなものがあります。準備の時間が少なかったけれども、そういうものを預かって、一つでも多く外に出したかったと思いました。提言の中にもありますが、地域間の交流が足りなかったということでしょう。たまたま隣りに、漁業関係の方の店があって、私たちも同じ青森県でもなかなか行かないところの方でした。イカの塩辛があって、私たちも知りませんでした。地産地消ではありませんが、青森県の情報私達にも入る仕組みが欲しいです。収穫祭が契機になって、地方から、お客様をとおして、青森県を知ってもらうためにも、また来年も頑張ってお店したいと思えますし、今回は、もう少し、資料やパンフレットを用意してお客様の袋の中に入れるなどしてPRしたいと思えます。

また、もう一つ、安心安全についてですが、産直をやっていると「これどのくらい農薬をかけているの」と聞かれます。私たちの小さいグループでもエコファーマーの資格を取ったり、勉強しているので、少しは説明できますが、「大きい百姓の人は隣同士でどうやって農薬をかけているの」とか聞かれます。特に皆さん、TVなどで勉強してよく知っています。そういうことは農協でも教えて欲しいのですが、パソコンを開くとすぐに分かります。しかしパソコンの無い人にも分かるようにして欲しいです。

(議長) 農業関係でいろいろとご意見をいただきましたが、アドバイザーの堤さん、いかがですか。

(堤アドバイザー) 宮さんから「小さく手間暇かけて作れば良く、多くのお客さんに売り込む必要はない」、そのあと、村井さんから「量と質が大切である」というご意見をいただきましたが、ここはジレンマに陥るところではないでしょうか。県内でも知らないことが沢山ありますが、外で知ってもらうためには、沢山出したいし沢山売りたい、けれども量が追いつかない。小さく手間暇かけて、大事に売るということも必要ですが、沢山出すということも必要なことで、マーケティング戦略としては規模や立場があるでしょうが、一つだけ言えることがあります。それは、私たちは売り手、作り手であると同時に、皆さん共通して食べる方、食べ手でもあります。食べ手が一番なんです。食べ手として外に伝えていく、クチコミで伝える。規模、質、量もありますでしょうが、食べ手として情報発信していくことも大切なことと思います。

(大山会員) に関して、農畜産物の機能性や成分の調査とありますが、皆さん農畜産に携わって、機能食品的な体にいい成分がいっぱい入っているということを前面に出せば、こだわり、差別化になりますね。実施案の中に専門機関への分析の依頼とありますが、県の機関でどういう成分の分析ができるか、無料なのか、有償なのか。こだわり農家や農工業で、健康にいい成分がいっぱい入っているかを知りたい。私達はそういう機関を有償で利用していますが、こだわり農家で知らない方もいる。例えば、県の六戸の機関は何の成分が分析できるとか、無償だとか、その辺の情報が欲しい。これから短期・中期に開発するものがあったとしても、この食品ならこだわっていいと思うためにも一度利用してみたいわけで、その辺について教えていただきたいと思います。

(岩瀬会員) 畑作園芸試験場ですが、正直に言いますと、できることは限られています。土壌や植物体の成分等について研究上必要な分析は時間をかけてでもやります。しかし、不特定多数の分析依頼を受け入れるシステムや窓口はありませんし、現在の研究員では対応できません。各地域の普及指導室でも普及活動の一環として対象になっている分の土壌分析を行っています。JA 十和田市や八戸市農業交流センター等では、有料で土壌分析を引き受けていますが、年間でどのくらいこなせるのかは個別に聞いてみないと分かりません。また、青森県薬剤師会でも有料でいろいろな分析を行っています。これらの機関では高性能の分析機器が揃っていますが、県の研究機関では比較的古い機器が多く、性能も不十分なために研究分しかできない現状にあります。

(山本会員) 分析の数字を表示するためには、法定分析機関での分析が必要です。青森県内においては青森県薬剤師会、衛生検査センター、あと大鱈の(株)マシスという会社があります。当センターでも分析はできますが、表示はできません。今、ニンニクの機能性成分の分析を一生懸命やっています。分析が専門の仕事ではないので、これについては試験の合間にやっています。あと、リンゴジュースのビタミンCとか、有機酸の分析とか、いろいろな分析ができるようにはしています。ただ、法定分析機関ではないので証明書を発行することはできません。皆さんの希望では、ダツタンソバにはルチンがどれくらい入っていて体にいいという結果が欲しいということなんだろうが、法定分析機関ではないのでそういうことができないわけで、あくまでも、バックデータとしてのお知らせにしています。ただし薬剤師会で分析した物については表示ができます。従って、県で分析ができるかできないかと言えば、できないと言う方が適当であると思います。あと、ふるさと食品研究センターでは、水産関係で結構分析ができます。ただし、人が減って、機械も古くなって、皆さんのご希望にはなかなか応えられない状況にあります。

(議長) それでは、次のテーマに移りたいと思います。東北新幹線開業ビジネスモデルづくりについて、「地域情報の集積と発信、上北エリアマップやタウン情報誌の作成」に関して、法人会青年部の布施さんいかがでしょうか。

(布施会員) テーブルにリンゴジュースがありまして、七戸あたりで作ったのかなと思ったら弘前でしたね。新幹線開業が大分近づいてきましたが、我々は十和田・上十三なんですが、聞くところによると、むつ下北方面が活発に動いているようで、駅舎内で地場産品を売る手段や戦略をとろうとしているようです。資料にもありますが、短期では、お客さんも「こんなもんだな」「あれは美味しかったけど、これは不味かった」ぐらいで帰ってしまう。そういう意味では、中長期的に資源を

活かすということで、温泉とか、乗馬とか、冬は雪が降って大変ですがスキーやスノーボードもできるし、小川原湖であれば夏は海のレジャーがあるとか、そういうそれぞれの地域の特色をリンクさせた観光方法を提示して、ＪＲとかＪＴＢに提案する、そこまでいければ素晴らしいと思いますし、それを魅力として観光客を呼び込むことができるかなと思います。そこで、先程の物産との繋がりもできてきます。

八戸もそうですが、盛岡以北はトンネルが多く、比較的長いため、明るくなると駅ということで、景色を見ながらの観光ができないものですから、スポット的に楽しむ観光ルートを季節に合わせて作るしかないでしょう。我々も観光するときに、先ず調べるのはホームページなんですけど、そこに何があるか、休みの日や仕事の後で調べて、これから行く町の情報を得ます。おいしい食べ物屋さんとか、娯楽施設とかを調べてから出かけます。ホームページのリンクを県としてできるのか、行政間でできるのか分かりませんが、今後必要になってくると思います。民間も、旅館業界、タクシー、バス、そういう施設同士がリンクできればいいと思います。

(議長) 三沢市商工会青年部の鈴木さんいかがですか。

(鈴木会員) 私、職業は観光業に属します。そういった観点から、青森県の上北には、食材、文化、観光施設など、全国にも胸を張れるものが沢山あると思っています。そういうものを情報発信していただかないと、いくら素晴らしいといっても、宝の持ち腐れではないですけど、知っていただけてこそ価値があると正直思います。先程の横浜町のナタネとか料理、ニンニクや長芋料理、様々な付加価値のある料理、他にはない特色を県外へ、東京や北海道でもいいんですが、大手旅行会社・ＪＴＢの商品開発担当者に売り出す、情報提供をして団体コースに取り入れて貰う。旅行会社の方に、こちらへ来ていただいて食べていただく、あるいは見ていただく。招待といいますが、そういう部分で、実際に味わっていただくのもひとつのやり方と思います。

(議長) 資料の 7 頁に「資源の再発見と魅力づくり」「上北地域の地理的・歴史的繋がりを軸とした観光ルートの開発」とあり、観光の切り口も様々あると思いますが、農畜水産物の豊富な食材や十和田湖・奥入瀬渓流といった自然、乗馬や温泉といった資源を活用して「健康」や「癒し」をテーマに観光推進に取り組むという趣旨について、十和田湖国立協会婦人部の森田さん、お願いします。

(森田会員) 十和田湖から参りました森田と申します。奥入瀬はご存じのように散策する方々がものすごく多いんです。私、ガイドもさせていただいておりますが、奥入瀬は世界に誇る渓流の魅力があり、平坦な道をどなたでも歩けます。今年たまたま吉永小百合さんがＪＲのコマーシャルに出ていらっしゃいまして、それを見て次の日すぐに訪ねて来た高齢者の方もいました。私、ＴＶは見えていませんが、お客様から教えられまして、75 歳のおばあちゃんが二人、吉永小百合さんと同じコースを歩かれたそうです。本当にＴＶの影響は大きいなと思っています。

奥入瀬はどなたからも素敵だと褒めていただきます。対応する私たちも一所懸命おもてなししなければいけないと思います。ああいうふうには、ＪＲを巻き込んで宣伝することは、上十三地区にとってもすごく有利だと思います。七戸に駅ができれば、ＪＲにアタックすることは絶対に欠かせないことです。昨年、白神山に視察に行ってきましたけど、あちらの観光課長さんは絶えず上京してＪＲに挨拶に行くそうです。これは七戸の駅ができて絶対欠かせないし、ＪＲとの繋がりを付けて

おかなければいけないと思います。

七戸に降りてからの二次交通ですが、今はレンタカーを利用してくるお客さんも沢山います。今、各地区に観光協会ができていますが、上十三をひとつにした観光協会を立ち上げて、そこにＪＲや観光業者を入れていただいて、ひとつの組織体として動くべきだと思います。十和田とか横浜町を個別に宣伝するのではなく、全体的に上十三の観光資源をＰＲすれば、必ずお客様は回って見えられると思いますので、十和田湖を軸にしたコースやメニューづくりを期待しつつ、私も一生懸命頑張りたいと思っています。

(議長) それでは、次のテーマに入ります。健康で安全・安心な地域づくりに向けた取組は、住民運動あるいは地域活動として継続されていかなければならないものです。食生活改善推進員として、日頃、食による健康指導活動を行っていらっしゃる小林さんに、ご意見を伺いたいと思います。よろしくをお願いします。

(小林会員) 小林です。よろしくお願いします。

食の安心安全ということで、私たちは、主婦のボランティアによって、食を通じて皆さんに健康で長生きを薦める活動をしている団体です。地産地消ということで、食材は常に地元のを、ないときは県外のを、ということで、会員一丸となって取り組んでいます。食の安全安心に関する事件や問題が報道されていますが、私たちも消費者として、本当に安全かなとこの頃思っています。先程、地産地消でニンニクとかいろいろ研究されているというお話でしたが、私たちもそういう情報を得て、さらに活動に繋げて行ければと思っています。

このあとの「食談義」のなかで、長芋コロッケを皆さんに試食していただいて、そのなかで、また少しお話しします。

(議長) 堤さん、何かコメントいただけますか。

(堤アドバイザー) そうですね、安心安全という言葉が当然のようになってきました。

このところのいろいろな問題が出ていますが、先程大山さんがおっしゃったように、安心安全、美味しいということが、プラスアルファとして数値的な評価が必要になっていくと思われれます。

(議長) 本日、「プログラム(骨子案)」について、皆様から議論あるいは提言いただいた事項や内容につきましては、今後検討させていただき、必要に応じてさらに個別インタビューを行うなど、関係機関や顧問の助言等も受けながら、プログラム内容に反映させていきたいと思っています。

### 3 - (2) 平成20年当初予算の検討状況について

(議長) それでは、次に議題の2「平成20年度当初予算の検討状況」ですが、これは、現時点での状況について事務局から報告を行います。

(事務局) 来年度の県の当初予算において現在上北地域県民局で予算要求を検討している内容を簡単にご説明申し上げます。資料2の左側が協議会の提言及び今日のプログラムにも関わる内容です。

この提言に対して、右側が県民局の検討している取り組みということです。それが大きく5つに分かれていて、1つ目が農村起業家の育成に関する事業です。例えば、農家レストランの開設や運営、産直施設の魅力向上を支援するというので、具体的には、農家レストランの運営講座を開催するとか、産直施設の魅力向上を図るために専門家を派遣して改善点等を助言していこうということや、産直施設を県外観光客にとっても魅力あるスポットに変えていくというような内容です。次のページから、もう少し詳しい内容を記載していますが説明は省略します。

2つ目ですが、飼料危機対策に関する事業です。近年いろいろ話が出ていますが、家畜飼料が極めて高騰しているということで、上北地域内の工場とか農産物の加工や出荷の段階でながいもをはじめとする野菜残渣が発生します。この残渣を活用した液状の飼料を給与するシステムを開発するというので、主に豚等に対するものです。また、飼料用稲を実際に栽培して、豚や牛、鶏に食べさせてみて、成長具合や肉質がどうなるのかということ进行调查して普及させていくという内容です。

3つ目が短角牛の振興対策に関する事業です。第1回協議会で北村局長からも説明がありましたが、安全安心な食材への関心や健康志向の高まり、家畜飼料の高騰が畜産の課題として注目されている中、短角牛は基本的には牧草だけで成長するというので、短角牛の資源を守るとともに生産基盤を強化して、県内の消費拡大を図り、県内でも食べられる肉ということでセールス活動していこうというものです。

4つ目が健康観光ツアーの推進に関する事業です。新幹線七戸駅開業に向けて保健医療関係者や観光関係者と行政が協力して上北地域が有する資源、例えば、牧歌的な風景、健康な食材、温泉、自然、乗馬とかトレッキングとかそれらのものを組合わせた健康と癒しを中心とした観光サービス体制づくりと旅行商品化を官民一体で取り組んでいこうという内容で、この中ではモニターツアーやJRとのタイアップによる商品化等も想定しています。

最後は、景観資源等を活用した広域連携の推進に関する事業です。これは、七戸駅の利用促進を図っていくということです。十和田湖や下北半島へ最も近い駅ということで七戸町がPRをしていますが、それをさらに進めていくために、八戸駅や青森駅から行くよりも七戸駅から行くのが、最も農村や牧場、松並木等の観光の景観が良いということをアピールしていくということで、景観のブラッシュアップや駅及び駅周辺の地域資源等の発掘・活用を図っていきます。ただ、七戸駅だけではなくて上北地域全域で、在来線の駅や道路も含めていろいろ取り組みができないのかと考えています。

(議長) 只今の事務局説明に対して、何かご質問やご意見はございますか。

(村井会員) 今の予算と言うことになると、予算の大きな部分を占めるのが人件費です。

一つ提案ですが、提言書の中にもあるボランティアの活用、学校で定年退職される先生方が、たくさんいらっしゃいます。例えば地理の先生、歴史の先生だとか、産業分野にしてもいろいろ専門の方がおられます。小学校から大学まで、この先生方をボランティアとして大いに活用することをご推奨したい。能力をもて余しています。例えば、八戸国際交流協会ですが、ボランティア活動として外国人の対応があります。実は米軍の三沢基地、ここは軍人だけではなく、民間の技術者の方が沢山いらっしゃいます。この方々は八戸市内でガイドをしています。これが、年間で3,000人以上となります。毎週金曜日にバスで1台から2台。これが全部、元英語の先生とかのボランテ

ィアベースでやっています。もう忙しくて間に合わないぐらいです。いろいろ話してみると、そういう方々は次の人生というか、次の仕事として非常にハッスルしてやって下さる。こういう方々が沢山おいでになりますので、人件費節約というのはおかしな話ですが、是非、活用して下さることを提言させていただきます。

(議長) 貴重な人材に関する情報提供とご提案ありがとうございました。

### 3 - (3) その他

(議長) それでは、次に「その他」ということで、皆様からご提言や情報提供等について何かございませんか。

(上野会員) 先程、森田会員から、JRのCMに吉永小百合さんがでている、ということでしたけれども、私も、ちょっと見ただけですが。その中で、十和田湖畔でフライフィッシングをしていました。実際に十和田湖でフライフィッシングができるかということ、やりたいと思っても、用具とかが揃ってないんじゃないかと思います。また、フライフィッシングのシーズンは今回終わりましたので、来年の春に向けて、吉永小百合さんがやっていたフライフィッシングということで、準備をしようかと思っています。割と高齢の方でもできるスポーツですので。

もう一つ、今、八戸からこちらへ向かってくる車のラジオの中で話されていたことなんですが、「美味しんぼ」というマンガの100巻目が青森特集ということで、早速、買って読んでみようと思っています。

(議長) 他にございますか。

(宮会員) 先ほど伺えば良かったのかも知れませんが、提言骨子案の3頁目のところに、市町村発元気な青森県づくり支援事業費助成金ということで、市町村発補助金とありますが、これについて、今具体的に説明いただかなくていいのですが、参考までに資料を提供してください。よろしく願います。

(議長) それでは事務局の方で対応をお願いします。

(事務局) 送らせていただきます。

(議長) 他にありませんか。

(事務局) 事務連絡になりますが、本日はプログラム骨子案について協議いただきありがとうございました。今後の取扱いですが、本日の資料を金曜日に発送させていただいた際に、プログラムに関して意見を記載してもらうための用紙も同封していますので、お帰りになられて気付いた点などがありましたら FAX 等で送信いただくようよろしくお願いいたします。

そして、市町村の皆さんにおかれましても、昨日の補助金等の説明も踏まえて、今後取り組む事

業等を検討されることと思いますが、このプログラムの内容についても併せて検討し、意見等をいただくようよろしくお願いします。

また、皆様にお配りした資料の最後に、文書のタイトルを「上北地域の元気づくりに係るメモ」と記したペーパーがあると思いますが、これは、第2回協議会で5人の学識経験者の方に顧問に就任いただいたということをお知らせしましたが、そのお一人方で株式会社電通消費者研究センターの研究顧問をされている酒井均さんから、当協議会へのご意見としていただいたものです。1ページ目の中段のところに黒字で書いてありますように「最も大事な顧客は、外にいるのではなく内にいるという発想が必要です」とか、その下の方に書いてあります「住みたい、住んで良かった、住んで誇りに思える上北地域」という点なども大切であるということで、まさしく当協議会が考え、取り組んでいることを理論的に補強いただくような形で、ご提案をいただいたということで、今後のプログラムづくりとか、その他の活動において活かしたいと思いますので、皆さんにもご覧いただけますよう、お配りさせていただきました。

(議長) 他になければ、本日の議事については以上で終了いたします。ありがとうございました。

(司会) 皆様ありがとうございました。それでは、引き続き萬田教授のプレゼンテーションに入りたいと思いますが、準備の間、5分程度休憩時間といたします。プレゼン開始時間は16時45分としますのでよろしくお願いします。

#### 4 プレゼンテーション

(司会) それでは、早速プレゼンテーションに入りたいと思いますが、ここで、講師の萬田富治教授をご紹介させていただきます。

萬田教授におかれましては、昭和47年に東北大学大学院博士課程を修了、同年、農林水産省に入省され、主に畜産分野を中心とした試験研究業務に従事して来られました。

平成14年に、現在の北里大学獣医学部教授に就任され、特に、北海道八雲町にある大学の附属研究施設であるフィールドサイエンスセンター長兼八雲牧場長として、「物質循環を重視した自給飼料による環境保全型牛肉生産」を基本とする資源循環型の牛肉生産に関する実践研究に取り組んでいらっしゃいます。それでは、萬田教授どうぞよろしくお願いします。

#### 【\*萬田教授プレゼンテーション】

##### はじめに

こんにちは、今日はこの会にお招きいただきまして、と言うとよそよそしい話ですが、私、顧問という立場で今日は参加させていただきます。十和田市民になって、やっと6年に入ったところで、この地域に対してはまだヒヨコでございます。そのヒヨコに顧問をしるということで、北村局長からの強い依頼があり、八雲牧場まで石崎部長とお二人で見えまして、取り込まれてしまいました。そして、何とか少しでもお役に立てればと思ひまして、引き受けさせていただきました。

今ご紹介いただきましたように私は、国の試験場におりまして、また出身も九州ですが、全国をずーっと歩きました。だいたい40歳を過ぎると3年にいっぺんの全国転勤を経ますが、最後は筑

波の研究都市で終わって、こちらにお世話になりました。そういうことで根無し草です。ですから、ある人は私のことを風の又三郎と言います。あれっ、何かいろいろやってたけど居なくなったねというようなことで、そういう吹けば飛ぶような存在でございます。

さて私は、この上北の元気の集まりの中で、どういう役割を果たしたらいいのか、いろいろ考えましたが、もう 60 歳を過ぎてまたいろいろややこしいことはできませんし、どこやらの党首ではございませんが、ひるまずに地で行こうと思います。私のニックネームは落下傘部隊の部隊長ですが、何もないとこに飛び込んで何かをしでかすということで、私の話は、非常に辛口です。カミさんは、岩手県の山深い遠野のそばの 17 代続く大きな農家の長女で跡取り娘でした。そういう岩手、東北の穏やかな女性が私と一緒に、もう 40 年以上になります。知り合ってからはずっと長く、彼女が 18 歳というのは間違いで、彼女が 15 歳で私が 19 歳だったかな、結婚したのは遅いんですが、そういう東北の女性に癒されながら、何とか今日まで生き延びてきました。あいかわらず毒舌なので、いろいろなところで物議を醸し出しますけども、僕も東北の人々の心情なりを良く分かっています。分かった上で、今日は短時間ですけども、私の言いたいことを言わせていただきたい。これは北村局長と、「顧問を引き受ける以上は、私はこういう男ですから忌憚のない発言します。よろしいですか。」と、ちゃんとお墨付きをいただいております。

今日お集まりの会員の皆様は、農業関係をはじめとして非常に多岐に渡っていらっしゃいます。ただ、工業関係は少ないですね。あとは観光関係からということで、ほとんど地元の関係機関や関係者の方々がお集まりですから、テーマとしては八雲牧場のことも喋りたいんですけど、今日、僕は新聞のコピーを用意してきています。こんなのは、もう、当たり前ですけども、何でわざわざこのコピーを取ってきたのかといいますと、つい先日、東京新聞に掲載されました。八雲は北海道の南のところですよ。そういうところにもかかわらず、なんで東京新聞に出るのか。ということは、やはり大消費地の東京の方でも、大変、私たちの取組みに関心を持っている。ところが北海道へ行くと、「あんたら、非常に変わったことをやってて、これじゃあ、北海道の農業畜産は、こんなことではやれないよ」と言うのは、地元の大きな声でした。ところが意外と大消費地は、こういうやりかたを支持してくれるんですね。わざわざ、北海道新聞に出た記事を東京新聞にそっくり転載してくれたんです。そういうことで、ご案内させていただきます。

皆様の検討の場でも、青森は食糧供給基地であり、どう消費地に対して情報を発信していくかということが、もう既に検討されています。今日来るに当たって、私も、この 10 月 5 日の提言や前回の議事録等を読ませていただきました。もう充分、いろんな分野から検討されていますから、私のこれからの話は、それらを踏まえて、私なりの考えを整理して説明させていただきます。

### 自然的資源の持続可能性

ここに書いてあることは、皆さん方にとっては当たり前のことですから省略します。これからの課題は地域レベルじゃあなくて、地球レベルの課題が求められているということが全て書かれています。それで、今日のテーマですが、何故こういうテーマにしたのかと言いますと、私たちは、だいたい皆様もいとお歳になってきています。もうそろそろ、次の世代のことを考えないといけません。私たちの地域のリーダー的な存在である会員の皆様が、自分たちの孫の代に何を残すのか。それは、お金を残すという人もいるでしょう。名誉・地位を残す人もいるかも知れません。政治家から芸能人まで殆ど世襲制ですから、それもひとつのやり方かも知れない。でも僕は、そのような価値観は転換すべきじゃないかと思います。私たちが次世代に残すことは、自然的資源の持続利用で

す。自然的資源、これは、非常に大事だと思いますし、その辺については後で具体的な話をします。これは人がどうしてもできないもので、自然的資源は、国土、土地、動植物まで全てを含んでいます。この自然的資源を、どう持続的に残していくか、これが現世代の私たちに求められていることではないかと思います。そこで、こういうテーマを付けました。農業も持続可能性が大切です。そのとき売ればいい。大消費地は買ってくればいい。今、食の安心安全、そういうものを作って、無農薬で、ポジティブリストもクリアして、青森から新鮮で安全で美味しい農産物・加工品を供給しよう。そして市場競争に打ち勝って、青森を打ち出していく、あるいは上北を打ち出していくということは基本的に結構です。しかし、いいんですが、それだけでいいのかとなれば、やはりそれは、持続可能なことが大事です。我々の世代が儲かればいいんですが、現実はなかなか儲かりません。そういうことで、私は、自然的資源のひとつとして、持続可能ということタイトルに付けさせていただきました。

### **生活者の視点**

それから、よく産官学と言います。私も農水省にいましたから、そういう立場でいろいろやりましたけども、産官学という言葉自体が固い。むしろ順序から考えれば、生産者、これは中心が農家の方です。そして、生産者であると同時に、多くは兼業農家で、生活者でもあり、消費者でもあります。ですから、区分けがつかない状況にある。一部の専業経営の農家は別として、殆どが生活者です。そして、これに関わる関係機関は市町村と県だけではありません。今日お集まりの皆様や民間企業など、いろんな人たちが支え合って、この大きな産業が成り立っているわけです。私は、こういう考え方で、全国でこういう発言をしています。産官学は、何処に行くのか。行ったって何かあるのかということです。

### **フィールドからの発信**

今、一番大事なことは、青森ということを見ると、上北を考えると、土地資源と豊かな水資源があります。先程、おいらせ町の方から名刺をいただきました。有名な奥入瀬渓流に代表される豊かな水資源があります。これらを、これからどうするか。生産から流通、消費に至るまで、相互連携と理解、そして、それを持続可能な農業の構築、これを皆さん今ズーっと検討されているんですよ、農業分野で。そして大切なことは、フィールドから発信することです。困ったときはフィールド、工業系、企業系、みんなそうです。困ったときは現場からというのは、世界各国の大企業も殆どそうで、全てフィールドからの発信・発進です。

### **楽しく心豊かに生きる**

それからもう一つ、今、医療も問題になっています。この検討会でも医療をどうするか協議されています。最近の医療の考え方を紹介しますと、今までは、死亡率、いかに長生きするかと、罹患率、いかに病気をしないかでした。しかし最近の医療の考え方は生活機能というふうになってきています。健康の指標は、病気を持っていても生活機能が自立していればいい。いずれ歳とともに、ガンになったり病気になっていくんですが、これは人間の宿命です。アンチエイジングなんて言って、お金になる商品や商売が流行っていますが、あんなのはおかしいと思います。病気であっても元気で自立できるんです。そういうことを考えれば、大変言い方が悪いんですが、高等医療や先端的な医療が無くても、もっと幸せな医療があるかもしれない。そのナイナイねだりで、立派な病院

を作ってくれ、お医者さん来てくれ、そういうことじゃなくて、もっと発想を変えていくということです。私も健康診断でいっぱい引っかけられます。しかしこのとおり元気です。これでいいんです。いつバタッと行くか知りませんが、こういうところも、都会との比較ではなくて、いかにこの地域で、精神的に自立して楽しく心豊かに生きていくかということです。

### 持続可能な農業に向けた5つの分野からの10の提言

次に、いきなりですが、医療と農業の連携についてです。この会議でも農業と医療の連携ということをお話していますが、私どもが言っている農業をよく見てください。いろんな辞書を調べると、土壌を耕して、作物を栽培し、家畜を育成する、ファーム、芸術、事業です。ファームですよ、そしてアグリカルチュア。カルチュアというのはもともと栽培なんです。そのカルチュアが文化になりました。すなわち、農業と言うのは文化に繋がるんです。文明は滅びます。工業技術、ビルディング、いろんな、人間が作った建物は滅亡します。変わって行きます。しかし、文化は残ります。その意味では、農業こそ青森のひとつの基幹産業ではないかと思えます。皆さんのおっしゃるとおりです。これまでの高度経済成長期は、農業も選択的規模拡大が求められ、経済性重視に傾斜してきました。このことをボートと池の関係で考えてみたいと思います。農というのは大きな池です、農業生産から生態系、文化の全体を含んだ地域の生活です。そこにボートを浮かべる。ボートこそが我々が検討してきた経済や経営です。農業でどうやって食べていくか、ボートばかり見ていて、池という全体像を見失ってきているようです。これからは単なる生産活動だけではなく、農業の持ついろいろな多面的な機能を活かして、どうしていくか。子供達や孫達に残す持続可能な農業をどうするか。そのことを5つの分野に整理して10の提言をしてみたいと思います。これからは、きつい話、耳障りの悪い話をさせていただきます。

### 「価値観・ライフスタイル」～自然観・農業観の再考

先ず、「価値観、ライフスタイル」。結局こういう会議で何をやるかということも、やはり哲学、理念をしっかりと持つということです。日本全国の地域興しの青写真でも、書いていることはみな一緒です。殆ど一緒。哲学、理念が見えない。それをどうするか。それはこの上北の風土を踏まえて、どういう自然観、農業観を再考するか。さらに、持続可能、ただ儲ければいい、売ればいいではなく、持続可能。ある時期までは頑張らねばいけません。苦しまねばいけません。一気にバラ色なんてありえない。いろんな先進地、成功した事例を勉強するのも結構です。資料も沢山出ています。参考にもなります。しかしそれは、よその所の条件でやったことです。じゃ、うちではどうするのか。やったところを真似る。これは、二流、三流です。ですから自分の足下をしっかりと見て、どういう自然観、上北、青森の自然観、赤印は具体的な行動提起ですが、これは後で説明します。そして、生活感、ライフスタイル、都会の文明を求めて、箱物の立派な建物をたくさん作る。しかしその維持費・運営費はどうするんですか。国が悪いと言えば、簡単ですが、貰った地域も悪いんです。そういうことで、何処でも大変な状況になってきています。ですからライフスタイル、都市文明を求めるのではなく、この青森、上北の風土の中で、どういう自分たちの生き方をするのかということが大切です。そして、農業をベースにした多彩な取組み、最近ではITが盛んです。議事録を見たら、八戸の方でソーシャル・ネットワーク・サービスですか、SNSと書かれていました。ああいうものも大事です。そういうITというものをうまく使って、地域の人たちが情報を共有していく。そして日本全国に発信していくことも大事だと思います。そして生産者と生活者の意識も

変えてもらわなければいけない。これは、ある国の青空マーケットの風景ですが、売られている果物は不揃いです。いつのまにか日本は大手流通業者にやられて、全国何処でも、定規格・定時・定量・大量消費です。そういう流通になってしまいました。ところが、よその国ではこの流通に乗るための農作物を作るために、グリーンハウスを使い、エネルギーも使うというのは、地球環境によろしくないということで、そこの国の人達は自国で育てた不揃いな農作物を選択する。そのような国もあります。

### 「政策・制度」～持続可能性を土台にした政策ビジョン

次は2つ目、「政策、制度」の問題です、日本は高度産業社会で、農業の生産額なんて微々たるものです。ですから、工業側や財界側から農業不要論が出るし、相変わらずEPA、FTAなどいろんな国との経済協定を進めています。だから、農業はどんどん衰退します。そういう社会の中で、やれ産地間競争だ、国際化だということをやっているのに本当に生き残れるのか。それよりも、もっと多面的な機能、これはWTO協議でもちゃんと日本から主張できます。一方EUでは環境支払いもやっています。そういうことをどうやっていくか。そのためには、政策ビジョンも持続可能性を土台に考えていかなければなりません。持続です。儲かればいい。当面しのげればいい。ではなく持続性です。次の世代をどうするのか。そして、ここに書いてあるような産地間競争、弱者切り捨てのグローバル農業経済、これを再考することです。アグリミニマム、それぞれの国は最低限の食料を自給する権利がある。これは国際的にも認められています。それは、北欧とか小さな国々がよく言っています。こういうのをこの地域から世の中へ発信していけば、さすがは青森、上北だと、全国の人たちから注目されます。自給率は国全体で50%というのが国際的常識ですが、青森県の農産物は、過剰生産とはいいいながら、実際の十和田市のマーケットで消費するのをみたら、地元産は5割から4割で、あとは他から来ているわけです。過剰生産県でありながらも、さっきの議事録にも出ていましたが、こういう実態をどう変えていくかということなのです。

隠岐という有名な島があり、ここは、昔、天皇が島流しにあったという土地ですが、ここには牛が放牧で創った素晴らしい景観があります。これが国立公園なんです。農業、畜産がキチッと行われることによって、持続的な畜産が行われています。たくさんの牛を飼うのではなく、それで、このような素晴らしい景観ができて、農業と環境、観光が共存し、島も保全できます。青森は、自然が豊かです。手つかずの自然はいいです。しかし、そこで我々は生産活動をして生活をしています。自然だけではなく、家畜がいる風景、農業がある風景が景観を創るということもご理解いただきたいと思います。

### 農業のあり方の再考

現在、国は、世界一の農産物を海外に輸出しようという政策を推し進めています。青森もそうで、青森県はリンゴですね。今EUでは動物福祉というのを進めています。多分、2010年から動物福祉が法制化されます。そうすると、EUに彼らの言うアニマルウェルフェア、家畜福祉をクリアした畜産物でないと輸出できない。霜降肉をつくってEUに出そうといっても飼育方をチェックされる。いくら霜降が世界で美味しいと言ったって、他の農産物然り、したたかなんですEUは。アメリカとは、かつてホルモン戦争がありましたね。なかなか、したたかなんです。青森から霜降牛を出します、リンゴを出しますと言っても、本当にこの地域は農業だけで成り立っていけるのかということも考えなくてはならない。要するに、大きな流れに乗るなということなのです。私の言っている

ことは、もっと足下を見なさいということで、私は何処へ行ってもそんな気持ちで話をしています。そういういろんな動きの中で、北欧の国ノルウエーですが、もう5～6回交流をやってきました。この国は非常に厳しい風土で、小農経営をしています。酪農家は一戸あたり14～15頭ぐらいいか飼っていません。彼らは、これでは安い輸入農産物とは勝負出来ないの、自国の農産物は農薬などの汚染がない、純粋さを前面に出しています。たとえば、このカタログのチーズは、このフィヨルドの美しい自然の中で、農薬、抗生物質等を使わずに、自然野草で育てて作ったチーズです。こういう売り方です。次は、もっと厳しいフィンランドで、北極圏に近いところ。ここもかつて交流していましたが、なにもあんな処で農業をやらなくたって、ここはノキアとかIT産業で、世界で一番の金持ちの国ですから、農産物は南の暖かい国から輸入したらいいだろうと言うんですが、頑として彼らは食糧自給率の向上を狙ってやっています。ノルウエーは自給率が日本と一緒で、日本は39%、この国は40%でもう放棄してもいいんです。いくらでも金が入ってくる。ノルウエーは、いま世界で一番の石油産油国、一番外貨を持っています。人口500～600万人の国。しかし、そういう豊かな金持ちの国、資源のある国でさえ、こうして自分たちは国際化の中で生き残るには、国民消費者に根ざして、純粋、汚染されない、そういうことを売りにしている。そういう独自の路線、決して国際競争に入らない。入ったって負けますよ。

#### **農畜連携～困ったもの同士が手を結ぶ**

私の描く夢は、左側に書いてあるとおりです。もう国土が空いていますね。耕作放棄地が増えていきます。山も荒れ、森も荒れ、それを家畜と耕種農業との相互連携を軸にし、この景観も観光産業も生かすという国土利用型の農業に変換していく必要があります。いままでは米さえ作ればいい、これは水を貯める、水を貯める農業の土地は水平なんです。水田です。牧場とか牧草地というのは、水平じゃなくてもいけるんです。ヨーロッパに沢山、観光客がリピーターでいくというのは曲線です。麦と畜産、水田はイタリアを除いて無いですから。あの素晴らしい景観は曲線農業が作っている。この夏スイスへ行ってきました。スイスはかつて熊が生息していましたが、もう、アルプスへ行っても熊はいません。あの自然豊かなスイスといっても、もう山のてっぺんまで人の手が入ったから、熊はもういないんです。その点、青森には未だ熊もいますよね。そういう曲線農業というのは、ヨーロッパの殆どで行われています。で、我々には未だ余力があります。これは水田です。これから米をどうしようかと。ますます消費量が減っています。ここをどうするか。ここは困った者同士が手を結ぶ。水田と畜産、困った者同士が手を結ぶ、森も困っている、森とも手を結ぶ。

ではどうするか。ひとつは消費者の安全安心の要請に答えて、国の農業政策も変わってきています。最初に、環境保全型の農業をやりましょう。これは、農薬、化学肥料を2割以上削減。もう青森もやっています。次はもっとレベルを上げて、こんどは半分にしよう。特別栽培です。もっとトップへ行こうと、有機栽培です。僕が学生の時は、有機農業なんて誰も相手にしなかったわけですが、今や、法律を作り、基本計画も作る。事業も補助事業もやる。こういう時代になってきた。だから、常に先覚者は通常と異なる発想でいいんです。いろんなところを学んで歩くこと、先進地をまねすることは金太郎飴、二流国三流国。有機農業の例がそうでしょう。いつのまにかトップになっちゃった。

次は我々の畜産関係です。畜産も世界のコーデックスガイドラインができて、日本にも有機畜産JASをつくりました。有機畜産とは有機農業も一緒ですが、土地に限りなく結合した農業です。これをはき違えて、餌は有機飼料を輸入して食わせればいい、有機タマゴ、有機ブタということ

言っている。これは世界で通用しません。世界の常識は、土地に徹底して結合したのが有機農業です。それこそ、ここ青森の地の利でしょう。関東圏は土地が少ない。青森は土地がたくさんあります。遊んでいるし、荒廃もしている。これが資源ですね。それをいきなりやるのも大変ですから、日本型持続畜産、いきなり有機までいかななくても、さっきの特別栽培、米、畑作物まで行こうということで作業をやっています。これが一番大事だと思います。

### 「教育・人材育成」～食農教育の導入と普及、地域リーダーの育成による地域特性を活かした農業の普及

産業興しや地域振興もいいですが、「教育・人材育成が大切」。わたしは、鹿児島に住んでいましたが、あそこは何故強かったか。地域に青少年が自主的に文武を学ぶ教育機関「舎」がありました。イギリス艦隊が鹿児島錦江湾に乗り込んできて、艦砲射撃をした薩英戦争です。そのとき向こうはすごい船でしょ。性能のいい大砲で撃ち込んでくる。薩摩軍の大砲は届かない、コテンパンにやられてもしぶとくて、降伏しなかったです。そこへ台風が来て、イギリス軍は碇を切って命からがら逃げのびるんです。台風のおかげです。それで、イギリスは上陸してきて「薩摩恐るべし、なんであんな貧弱な武器で最後まで戦うんだ」。それはそういう教育制度があったわけで、それを真似したのがボーイスカウトです。イギリスが薩摩を真似したんです。ボーイスカウトの原型は薩摩の教育制度です。自主組織、子供達が自立する、そこに大人が関与する、そういうやり方です。そういうものを、青森の風土を踏まえたときに、体験型の食農教育、カリキュラムという。教育改革も出ておりますが、これを取り込んでいく。郷土を愛する心も育ちます。もうひとつは、地域リーダーを育てなきゃいけない。優秀な若者達は、殆ど東京へ行ってしまいます。どこでもそうです。優秀なのは行っちゃう。これをどうするか。いろんな大学もありますし、研究機関もありますが、それはそれで、もう一つ、知・徳・体のバランスのとれた人格形成を目的とした高等教育機関、地元根ざしたリーダーを育てる機関を考えたらどうか。立派なもので無くていいです。そういう趣旨で創っていく。

フィンランドの真ん中で、ヨーエンス大学に10年前に行った時のことです。ここの大学は農場があって、まわりの子供達がいっぱいいる。食農教育で、10数年前からやっている。子供達は牛に乗かって遊んでいる。日本では危ないから止めろと言いますが。女の子達は、畜舎に入って子牛を哺育している。ここでは子供が搾乳している。誰も大人は見えていない。みんな自分たちでやる。大学農場で、私たちは事故があったらどうする、保険も入れなきゃ行けない、大変ですね、ケアが。学校の先生は大変だと思います。そういうところの差はどうするか。子供に任せる。なかなかの冒険ですよ。一気にできません。しかし、私は、究極の姿は自立、独立心の強い子供を育てるには、こういうところも考えておく必要があると思います。

今年の8月、スイスとフランスを見てきました。これは、スイスに近いフランスの国境の山岳地帯で、十和田、八甲田、あの辺の田代平のような感じで牛を放牧しているんです。その牧場で、お爺ちゃんと小学校へ入ったばかりの孫が、同じ棒を持って牛追いをやっています。日本であれば、この爺ちゃんは どうしてこんな子供に牛追いをさせているのだらうと思うかもしれませんが。日本では子供と一緒に牧場歩いているなんて見かけません。これは「刷込」をやっているのです。小さいときから、こうやっておかないと都会に逃げられる。私たちを見てください。農村地帯でファミコンとか、テレビとか、それで後継者ができますか。これがフランスでは、山に行けば、まだこういう農家があるということです。

田舎道を車で走っていたら、牛がドンドンやって来る。みんな角をつけて、カウベルを鳴らしている。この後ろから牛を追って、若い経営者の父親と娘さんがやってくる。まだ小学校くらいでしょうね。学校から帰ってきたら、こうやってお父さんと一緒に牛を追っている。非常に明るい笑顔。日本の農村地帯へ行くと、元気な人もいますが、大体皆、お婆ちゃんとお爺ちゃん、下を向いて歩いている。こういうのは当たり前なのですが、いつのまにか日本はそういう文化を失ってしまったんです。これをどう復活するか。生活振りもそうでしょう。日本では、物が溢れています。海外のホテルへ泊まったって粗末でしょ。朝飯なんて見てください。

### 「技術開発・ビジネススキル」～環境配慮型農法の開発と普及

次に「技術開発、ビジネススキル」。これは今言った環境配慮型農法に向かって普及を図るためには、既存の組織だけではダメだと思います。大学は今、難しい論文を書かないと評価されないし、昇格、昇任しません。ですから、地域のことには、なかなか取り組めません。特に若い人はそうです。そして定年が近くなるとそろそろお返ししようかとなりますが、そのように気にする若い先生はまだ少ない。ですから独自の持続的農業の開発機構の立ち上げが必要です。これは地域振興公社が音頭をとってもいいし、こういうのをキチッとやるシンクタンクを創った方がいい。もうすでに動いていると思いますけれども。もうひとつは、ただ作るのではなくて、農家にもビジネススキルやマーケティングといった感覚を持って貰いたい。昔に戻るのではなく、自分で品物を作って、売っていく。そういう人も育てる必要がある。そうしないと若者が魅力を感じない。農的生活、豊かな田園でのびのび生きるなんて言ったら、今の若者は、それは無理ですね。やはり、自分も楽しく、そして買っていただいて喜ばれる、それで収入がある。そういうスキルを身につけるための地域講座が必要です。誰が講師をやるのか、講師の養成もしないといけない。

スイスのチューリッヒから近い所に、有機農業の世界の研究センターがあります。そこへ、この8月に行ってきました。世界の有機農業の会長にお会いしましたが、この会長曰く、「10数年前は、我々の取り組みを誰も相手にしてくれなかったのが、今や世界的な組織になって、ファンドも基金もいろんなところから集まってきている。研究者も世界中から集まってくる。」と、ここで何を言いたいかという、最初の立ち上げはマイナーでいいし、異常と言われてもいいんです。哲学と理念を持つことなんです。それが無いから右往左往して、あっち見てこっち見てになっちゃう。この所長には、私、感銘を受けました。配付した新聞に出ていますけど、八雲牧場も13年経ちました。そういう仕掛けでまだまだ苦勞しています。そんなもんです。一気に、すぐ世の中は受け入れてくれません。しかし、志を忘れずに、これでもかこれでもかと、ネバーギブアップが大事ななと思っています。ということで、この所長からは非常に勇気をいただきました。

### 「生産者・生活者連携」～生活者参加型の農業の普及

「生産者と生活者の連携」これも大事です。これは、農家レストランとかいろいろな取組をやっていますから、それでよしいと思いますけれども、そういう市民参加型のプログラム構築が大切です。これは阿蘇の例ですけれども、阿蘇もどんどん人が減っちゃって、草原を維持できないということで、都市の消費者と一緒に野焼きをする。これこそ、地域の資源を消費者参加型で守って、そこで作られた肉を食べている。私が肉を1kg食べれば、草原の何ヘクタールが守られる、そういう理念を支持する消費者もいる訳です。これはひとつの例で、こういうやり方もある。

次は、フランスの山岳地帯ですが、カウベルを付けた牛ですね。ここに行くと、奥さんですが、

我々の前で牛の背に座って見せるんです。こんな牛飼、日本では今いないですね。これこそ、動物とのふれあい、アニマルセラピーです。乗馬もいいんですが、やはりこういう牛だって、いわゆる酪農家の牛でも親しくふれあうことができます。

で、これから、また霜降牛の話です。これは、向こうへ行くと赤肉です。日本では、スキヤキとか網焼きにするから固いけれども、向こうはほとんど生肉です。だから固くない。食べ方、料理法があります。私の友達で、神戸で港湾事業をやっている社長がいて、彼に、以前牛肉を送ってあげたんです。すると、「この間ゴルフコンペで霜降牛が商品に当たったけど、あんなもの食傷気味で食えないよ。なんで日本人は、霜降、霜降と騒ぐんだらう。うちの家族は大家族だけど、食べるのはオージービーフの肩ロースの厚いやつを買ってきて、サーっとあぶってそれを皆んなでスライスにして食べる。いくらでも食えるし。」というふうに食傷気味だと言っていました。霜降り肉は最初の一口食べたら美味い、あとは食えないでしょ。若者はまず口に入れない。日本の消費者のニーズだとか、いろいろ言うけども、本当に消費者のニーズなのかどうか。誰かが仕掛けてるんじゃないかな。今日、終わったら、試食会があるそうですから楽しみにしていますが、食べて本当にどうなのか。そういう料理まで含めたことも大事かと思えます。

併せて、このチーズ。さっきのカウベルを付けた牛は、乳と肉をふたつ生産する品種の牛なんです。あれがヨーロッパでは当たり前だったんです。ミルクを絞って、肉も食べる。乳肉牛兼用種といえます。日本はアメリカ型に変わっちゃったんです。ミルクだけ取るホルスタインと霜降を作る黒毛和種の二つに特化したんです。ヨーロッパの彼らは、最後は肉にして、途中の生産物のミルクは子牛の上前を一寸いただいてチーズにして両方楽しむ。これは地域の文化ではないですか。その土地でできた草で、牛を飼って、ミルクと肉を取る。それも穀物多給型の霜降ではなくて、これこそ地球環境にやさしい畜産物ですね。青森もかつて広大な草原を使って、やった経験もあります。先を見て、ドンドン取り組みました。でも、僕は、もうちょっと持続性を持った方がいいなと思います。コレ駄目だなと思うとサッと変わるというところをどうするかが大切です。

## 実践と実学

また耳の痛い話になりますが、今言ったいろいろなことを実現するためには、学術的研究や政策論議をいくらやっても実践が伴わなければ、よその情報の切り売りにすぎません。今、大事なことは、個々の現場の多様性を大切にしたい取り組みです。そこで具体的行動を起こすこと、これが私たちに求められていると思います。失敗してもいいですよ。いろんな目を持って、皆んながいろんなところでやる。それを束ねて、反省しながら次へ進んでいく。今日の会議の場でも来年の具体的な予算の話とかいろいろ出ていますけれども、これが一番大切だと思います。

それで、僕も青森について、いろいろ勉強しています。ここからは、多くの人材が出ていますが、皆さんご存知のとおり、広沢安任という素晴らしい方がいるんですね。この方は谷地頭の開拓に、会津藩から斗南藩に左遷させられて、ここで自立し、彼は一民間人として、広大な仏沼の周囲で牧畜に取り組みました。水田は農家が使うので、水田農家が使わない土地を使おうということで仏沼の周りを開拓した。やっぱり先を見る目があります。日本はこれから近代国家になるし、肉とミルクが必要だということです。そして新渡戸十次郎は、ここに肉とミルクを買いに行っています。先人達は、もう地域資源を見抜いているんです。当時は、国際交易ではないんです。いくらタンカーがあっても、穀物は誰も持ってきません。そこで根ざすしかない。この広大な土地を見たら、もう、肉とミルク。近代農法を目指してアメリカから、クラークとかの農業高校の校長でなく、本当のイ

ギリス農家から農民を二人呼んで来て、大農、いわゆる新しい牧場をやるわけです。明治天皇も御幸で来ています。そして翌日には、大久保利通も見に来ています。明治政府が関心を持つだけのものです。そして、政府から金も引き出しています。機会があったら彼の本を読んで欲しいんですが、彼こそモノマネをやらない、自主自立と、徹底した地域資源の利用、そして、実践と実学の人です。いくら大学をいっぱい作ってもだめです。東京へみんな行ってしまいます。実践と実学、これをどうするかです。

また、この人の偉いところは、野草を見直すんです。野草を69種類、全部家畜の餌に使う。これこそ地域資源です。今、これみんなひっくり返して改良草地に変えて山の上へ行ったら、あの牧場をどう維持するか、人もいない、金もない、荒廃する、元の野草地に戻せばいいとか、いろんな声も聞きます。先人達は、ちゃんと、そこその資源で牛を飼うということをやっています。こういうのが、いつの間にかクルッと変わっちゃったわけです。

### 畜産こそ、地域資源集約型の産業

これは、放牧牛の群れを空から撮影したスライドですが、これは水田の稲に良く似ていますね。米というのは土壤に薄く分散しているミネラルとか太陽エネルギー、光合成を使って、実に濃縮して、最後はお米にして、我々が頂く。資源集約型産業こそ農業で、資源浪費型は農業ではありません。資源集約型、薄く広く広がる地球上の資源を集めています。この放牧牛を見てください。トラクターもハーベスタもありません。牛たちは、自分が歩いて行って、人間が食べない草を食べて、肉とミルクに変えてくれます。土地利用型のチャンピオンは水田農業だと言っていますが、畜産こそ、牛こそ、草食家畜こそ、地域資源集約型の産業ではないかと思います。これをいつの間にか失って、穀物が高くなったから畜産クライシスにどう対処しようかとか、行政もいろいろ頭を痛めています。それはそれで、生産者をどう持続させるか、そういう政策は打っていかねばなりません。しかし、持続性はどうなるんですか。三井物産がブラジルの10万ヘクタールの土地をスイスの大手銀行経由で投資し、大規模農場の経営に参画します。それは国益だし、消費者のために大豆をブラジルで作るといような商社が、グローバリゼーションですから、ドンドン動いてきます。じゃあ、うちに回ってくるのか。下北とどんな関係があるのか。ありますよ、それはかえって困るということです。そういうことで、私は常に地域主義、自然的資源循環主義です。

古牧温泉の支配人さんも当協議会の会員だそうですが、八雲にも小さな旅館、古牧温泉のような大きな旅館ではなく、銀婚湯という旅館があります。私たちの牧場の肉は東京の大きな消費組合に送っています。しかし、地元の人たちには一番良い肉を食べて貰おうと、一番いいところは地元の銀婚湯に食材として提供しています。今日のメニューは牛肉の「タタキ」です。これは私どものコースで料理長が腕をふるってくれています。そして、川辺の熊が出そうな野趣あふれる露天風呂で癒される。沢山あるのも大事ですけども、ここだと本当に美味しい食べ物を求めて、その土地の温泉につかって、地域の人と交流することができます。

今日は、牧場の話はできませんでしたが、これが、八雲牧場のスタッフです。皆様のお越しを、鍋を抱えてお待ちしております。

丁度、時間です。大変勝手なことばかり言って、けしからん奴だと思われたとことでしょうか、自己紹介にありましたように、風の又三郎のような存在でお許しいただければと思います。今日は、ご静聴、有難うございました。

(司会) 萬田教授どうもありがとうございました。それでは、只今のプレゼン内容に関するご質問を受けたいと思います。また、せっかくの機会でございますので、畜産業や農業に関して聞いてみたいことなどがありましたら遠慮無くどうぞ。

(大山会員) 2点お伺いします。先生は農水省ご出身と言うことでしたが、うちの会社は青森県の農産物の付加価値商品、醤油とか焼き肉のタレを製造販売しています。日本全国に、付加価値商品の他に、生野菜も販売しています。ニンニク、長芋、ゴボウの詰め合わせセットを提案するんですが、このゴボウの賞味期限は何ヶ月なのとか、ニンニクは、長芋はどうか。スーパーでは生野菜に賞味期限はないので、生野菜の賞味期限の定義を作ってはどうかということ。もう1点は、米の新米、米の収穫から何ヶ月が新米というシールを貼れるのか。リンゴジュースも売っていますが、それにブレンドして生協の共同購入に出しているんですが、新物というシールを貼って欲しいといわれます。新物という定義があるのか。2点ほど聞きたいと思います。

(萬田教授) これは、結論から言えば無理ですね。貯蔵方法によっても違うし、農水がそういう基準を作ること自体が無理です。それよりも地元の消費者、提供先の消費者がどのようなことを要求するか、ケースバイケースで対応するしかないですね。

野菜の賞味期限については、品種によっても日持ちが違うし、それを科学的に明らかにすることはできると思います。どれくらいで鮮度が落ちるとか。ただ、日々少しずつ変わっていく野菜の鮮度をどうやってチェックするのか。もう一つは、新米ですか。農水には難しい問題でしょう。消費者はそこまで要求してきているんですか。

かつては奥さん方も、買い物に行って、匂いを嗅いだり自分で判断して、食べれる食べれないってやっていたわけで、それを、スタンプとか基準に集中するような流通の仕組みも見直していく必要があると思います。地元の生産者と消費者の連携とは、そのような理解のもととなる活動が大事ですね。

## 5 閉 会

(司会) 萬田先生ありがとうございました。以上をもちまして、第3回上北の元気結集協議会を閉会します。どうもありがとうございました。